

[エッセイ]

私たちのドイツ留学体験記

西岡 葵：ドイツで自分を見つめる

私がドイツへの長期留学を決めた理由は、ゲッティンゲン大学での一ヶ月間の語学セミナーを経験したことからでした。当時はドイツ語への知識や意欲もさほど無くて、ただただ憧れていたドイツへ行ってみたい、ドイツの生活を経験してみたいといった様な単純な動機でした。しかし、実際現地へ行ってみると自分のドイツ語力の低さに失望しました。相手の言っていることも分からず、自分の伝えたいことも上手く伝えられず、もどかしい思いでした。それでも日々の授業についていくことで、少しずつでも単語量や文法の知識が身に付いていることが実感出来ました。この一ヶ月が、私の中で初めてドイツ語と真剣に向き合った時間でした。この一ヶ月間のセミナーを通じて、行く前には全く考えてもいなかった長期留学に挑戦したいという気持ちが、自然と強くなっていきました。

そして半年後、私の二度目のドイツ滞在が始まりました。以前の時とは違い、新しい環境に一人きりで乗り込んでいくということ、全てのことが自分の責任になるということが、とても不安でした。しかしそれは、後に自分の自信へと繋がる要素ともなりました。大抵のことは為せば成る。外国で生活することで、度胸が備わったと自負しています。

初めの一ヶ月間は特に、日々の勉強に追われ、生活はもちろんですが、ドイツ語自体に慣れることに精一杯だったように思います。しかし、慣れてしまうと、住めば都とはこのことかと思うほどに、滞在していたフライブルクの街はとても住みやすく快適な街でした。周りには黒い森の自然が溢れ、その豊かな緑や、自然好きのドイツ人達の素性を肌で感じる事が出来ました。週末には公園や黒い森に出かけて行き、ドイツ人や他の留学生達とよくバーベキューやピクニックをしたことは、留学生

活の中でも楽しい思い出です。

そんな私の留学生活の中で、考える機会が最も多かったのはおそらく日本についてだと思います。異国にいるからこそ、見えてくる日本のカタチがありました。そして、それは必然的に自分が日本人であることを意識させてくれました。

幸運にも、私は留学中に素晴らしい人達に巡り会う機会を得ました。彼らは私に、ドイツの文化やドイツのあらゆる面についての様々なことを教えてくれました。生のドイツを知ることが出来てとても勉強になった半面、私と彼らの、感じ方や考え方のギャップにも驚かされていました。例えば、彼らはよく口をそろえて日本人が親切で控え目なことを褒めていました。それは私一人の言動に対してというよりは、日本人全体に向けられる一般的なイメージであるようでしたが、それがいつも不思議でした。どちらかと言えばそうした日本的なイメージは、海外ではマイナスのものだと思っていたからです。私もそうでしたが、断ることが憚られて Nein と言えなかったり、相手につい合わせてしまうことがありました。語学クラスにいた欧米人達のように、積極的に発言しまくることも多くはありませんでした。なかなか周りの様に出来ない自分をじれったく思うこともありました。しかし、そういう繊細なところが、日本人らしくて良いと彼らは言ってくれたのです。僕達が持っていない心遣いや、相手を思いやる気持ちがあると。

言われてみて初めて、自分がマイナスな部分ばかりを気にしていたことに気付きました。世界には本当に様々な人がいるし、文化の違いはどうしてもあります。でも無理に変える必要もないんだ、と思えるようになりました。自分のペースで頑張ってみよう。

それからは気持ちに余裕が出来て、留学生活自体がゆとりのあるものへと変化していきました。変に周りと比べようとしなくても良い、自分は自分だと受け入れることで、人への接し方も変わったように思います。そして自分の中にある日本人っぽさとも、上手に付き合えるようになりました。

自分の常識に捉われるのではなく、視野を広げることで、新たな世界が広がるということを実感した留学生活でした。世界中の人の様々な価値観に触れることが出来て刺激を受ける一方で、自分や自分の国につい

で見つめ直す機会ともなりました。日本にいただけでは決して出来なかった体験だと思っています。私のドイツ留学に関わって下さった全ての方に感謝しています。

野上綾乃：回り道をしながらたどり着いた結論

「悔しさをバネにし努力すること」「勇気を出して一歩踏み出すこと」「前向きに挑む気持ち」。これらのことが大切であると痛感させられた、私の留学体験を記そうと思います。

私は2回生の9月から3月まで、ドイツのゲッティンゲン大学に留学しました。交換留学生としての枠の獲得を目標にし、交換派遣の試験までに独検3級レベルのドイツ語を習得しようと努めました。その結果、光栄なことにゲッティンゲン大学に留学する権利をいただき、また同時期に受験した独検3級にも合格しました。その後も留学までに出来る限りドイツ語力を伸ばそうと勉強を続け、留学直前には独検2級を習得しました。

しかし、いざドイツへ行くと、まるでドイツ語がわからない。人々が話していることを聞き取れず、街中知らない単語で溢れかえっている。語学集中コースのクラス分けテストの結果は、A2.2という初級コース。今まで自分が習得してきたドイツ語は、全く通用しないと思い知らされました。また、私のドイツ語力の自信喪失に追い打ちをかけたのは、語学コース初日の親睦会でした。参加者は欧米人がほとんどで、ドイツ語ができない人は英語で会話をしていましたが、英語もドイツ語もたどたどしかった私は、結局誰とも打ち解けることなく帰宅しました。留学早々大きな壁に出くわし、お先真っ暗と沈んでしまいましたが、「まだこれから半年間ある、帰国までに必ず上達してみせる」と決意し、毎日授業の予習・復習に加え、ドリルを用いて文法の勉強をしました。また、クラスメイトとも徐々に打ち解けていき、1か月の語学集中コースが終わる頃にはドイツ語を話すことに慣れてきて、仲のいい友人もできました。

一方、人見知りな性格であるために、友人から遊びに誘われても断ることが多々ありました。特にヨーロッパの方々の集まりには、語学コー

ス初日の出来事がトラウマになっていたため、いつも敬遠していました。いつまでたっても自分の語学力に自信を持つことが出来ず、再びみじめな思いをするのが怖かったのです。それを補うために、机に向かってドイツ語を学ぶ日々を送っていましたが、クラスメイトのドイツ語はどんどん上達していき、取り残されるばかり。ドイツ語能力を伸ばすために何が必要なのか、友人に相談したり、振り返ってみたりしたところ、「座学と実践を繰り返す」ことが自分にとってドイツ語習得の近道になるのではないかと気づきました。後日、友人に隣町までハイキングに行こうと誘われたとき、勇気を出して参加を決意しました。ハイキング当日、6人中知り合いは2人だけでしたが、自己紹介から始まり、専攻のことやそれぞれの母国のことなどを話していくうちに打ち解けていき、いつの間にか楽しくドイツ語を話せていました。その後も定期的にホームパーティーを開いて親睦を深めていき、ドイツ語を話すことと、その日に間違えた文法、言いたかったけど伝えることができなかった表現や単語を復習することとを繰り返すうちに、「以前よりもドイツ語を話せる」と自覚できるようになりました。

留学中には様々な壁が立ちはだかり、上手く乗り越えられたもの、上記のように足掻（もが）いてようやくよじ登ることができたもの、最後まで乗り越えられなかったものがありました。しかし、いずれにおいても、「前向きに挑む気持ち」が留学成功に導いてくれたと思います。初めての交流会で自信喪失したときも、なかなか一歩踏み出せなかった時も、最後には「挑戦心」「目標」が私を後押ししてくれました。冒頭で書いた「悔しさをバネにし努力すること」「勇気を出して一歩踏み出すこと」「前向きに挑む気持ち」を学ぶことができ、その他にも多種多様な文化、人生観、宗教観に出会うことができ、よい経験となりました。貴重な経験をする機会をいただき、本当にありがとうございました。